

『ラインジャッジの判定のしかた』

JVA国内事業本部
審判規則委員会 指導部

1 試合前

- 1) 試合開始1時間30分前までには、競技場に集合すること。
- 2) 競技場に集合したら、コート等の設営や試合に必要な用具等のチェックを積極的に協力すること。
- 3) 試合前60分にレフェリー・ミーティングが行われるので、主審、副審、記録員、ボール・リトリバー、モッパーと綿密に打ち合わせを行うこと。
- 4) レフェリー・ミーティングには、審判服装で参加すること。胸には自分の公認された資格のワッペンを付けること。
- 5) レフェリー・ミーティングの前にラインジャッジは、誰がどのラインを担当するのか、また試合中のいろいろ起こるケースに対してどのような動き方をしたらいいのか、どのようにお互いに協力をしていくのかを事前に打ち合わせしておくこと。特に、主審に見えにくい所や、アンテナ外通過、フライング・レシーブで床にボールが落ちたかどうか、ブロッカーやレシーバーのボール・コンタクトがあった際の出し方等をよく打ち合わせておくとよい。
- 6) フラッグの点検をする。
- 7) 試合開始30分前には、記録席後方に集合すること。
- 8) 公式ウォーム・アップが終了したら、担当の位置につき、ネット・アンテナが正しい位置に取りつけているかどうかチェックする。特にアンテナの取り付け位置については、ゲーム中でも十分注意する。

2 試合中

1) ラインジャッジの位置

- ① 自分の担当するラインの想像延長線上でコートの各コーナーから2m離れ、ラインに正対して、視線はライン上に置くようにして立つ。フリー・ゾーン内に立つ。エンド・ラインはライト・サイドのコーナーから、サイド・ラインはレフト・サイドのコーナーから統御する。
- ② ラインジャッジは、レフト・サイドからのサーブの時は、サーバーの妨害にならないように、サイド・ラインの延長線上に、サーバーの後方に位置する。

2) ラインジャッジのフラッグ・シグナル

- ① フラッグ・シグナル（ボール・イン、アウト、ボール・コンタクト、サーバーのフット・フォールト等）を使用し、それをしばらくの間続けなければならない。

- ② ラインジャッジは、起きた反則を確実に判定し、速やかにフラッグ・シグナルを示す。主審は、そのシグナルを確認して最終判定を示す。
- ③ ラインジャッジがフラッグ・シグナルを出す場合、身体とフラッグはラインに向け、顔だけを主審の方に向けて目をあわせ（ライン判定をしっかりとしてから）判定を伝えることが、お互いの信頼関係を保つ上でも大切である。
- ④ 構えた姿勢から足をそろえて、ボール・アウトはフラッグを真上に素早く上げる。（フラッグのポールに人差し指を添えてボールを握ると良い。）ボール・インは同様にフラッグを下げて指す。肘が曲がらないようにフラッグの先がラインを指すようにする。

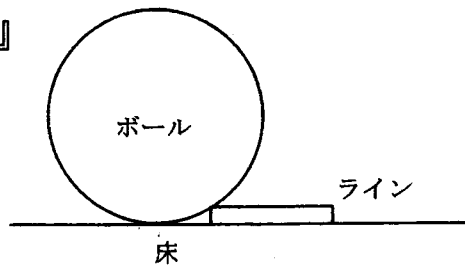
3) ラインジャッジの任務

① ラインに関する判定。

- a ボールがライン付近に落下した場合は、そのラインを担当するライン・ジャッジだけがシグナルを出す。（1人1線が原則で「ボール・イン」はライン2m以内とする）《下図1参照》。各コーナーのコートに落ちた場合は2人のラインジャッジがシグナルを出す。《下図2参照》
- b ボールがインか、アウトか、ボール・コンタクトの判定は、速やかにシグナルを示さなければならないので、判定は躊躇してはいけない。シグナルが遅れると選手がアピールをする原因となる。
- c ラインジャッジの姿勢については、アウト・オブ・プレーの時は自然に直立の姿勢でリラックスして良いが、サーバーがボールを打ってから、ラリー中は移動しやすい低い姿勢を取り、目の位置を下げて身体（腰）でボールを追う。目の位置が高いとボールを上から見ることとなり、ボールと床の接点が死角となりボールがラインに触れているか明瞭に分からない。
- d 判定の方法は、最初はボールを見て、ボールが床近くに来たらボールから目を離し、ラインを見て判定をする。

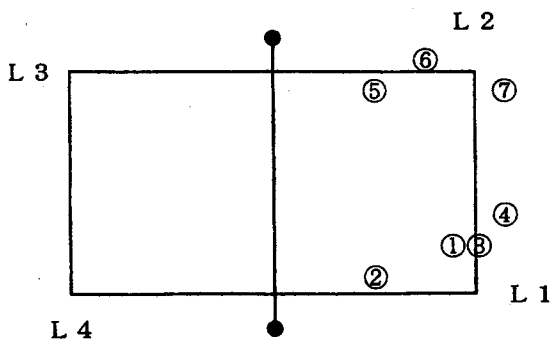
《図1》

『ボールと床の接点』



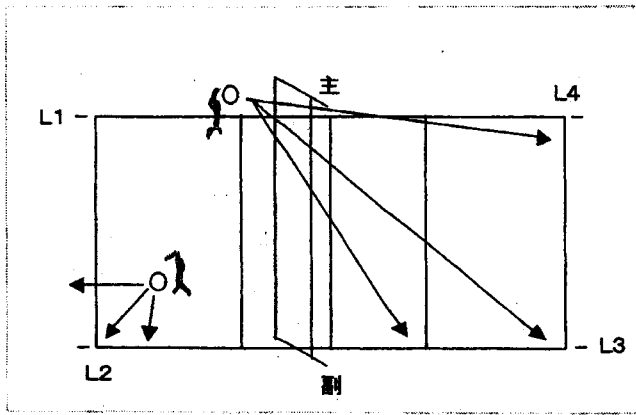
《図2》

『コーナーのボール・イン、ボール・アウトの判定』



- | | |
|------|----------------------------|
| ボール① | L 1, L 2 が判定 (コーナー 2 m 以内) |
| ボール② | L 1 が判定 |
| ボール③ | L 2 が判定し、L 1 も L 2 を確認し追従 |
| ボール④ | L 2 が判定し、L 1 も L 2 を確認し追従 |
| ボール⑤ | L 3 が判定 |
| ボール⑥ | L 3 が判定し、L 4 も L 3 を確認し追従 |
| ボール⑦ | L 2 が判定 |

『判定の仕方』

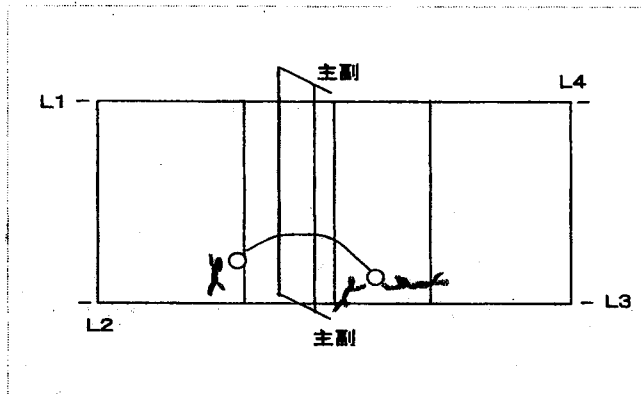


① ライン判定

- a サイド、エンド・ライン にぎりぎりに打つ
- b コーナ(1M 以内) に打つ
- c 選手でボールが見えない時の判定

② レシーブ・ボールが床に触れたかどうか

- a 主審・副審のアシストをしなければいけないので、低い姿勢でボールと床面との接点を見る。ボールが床面に触れた瞬間にフラッグシグナルを出す。
- b タイミングが遅れ躊躇すると、選手のアピールのもとになるので十分注意すること。

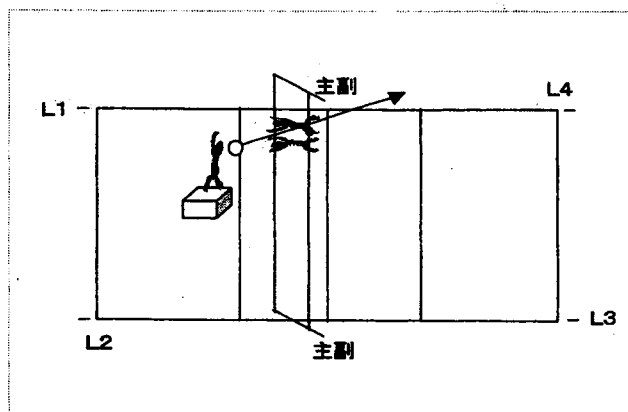


床に落ちたボールの判定

- a フェイント・ボール・tip playをフライング・レシーブで手の甲でボールを上げる。
- b ブロック・カバーのプレイヤーの陰になってプレーが見えないケース。

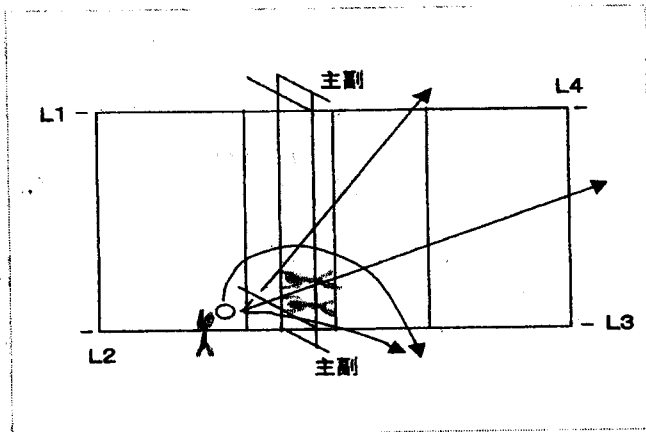
③ ネット上の許容空間の外側を通過したボールを取り戻すケース

- a ボールがアンテナに当たった場合
 - ・ 確認できたライン・ジャッジのみがシグナルを出す。
 - ・ ネット幅 1m の間のアンテナに当たった時は、一番見やすい位置にいるライン・ジャッジが判定すべきである。
- b スパイカーがボールをスパイクをして、ブロックにはねかえったボールが、そのスパイカーに当たった場合
 - ・ 特に主審側で起こるケースは、主審の死角になるケースが多いので担当のライン・ジャッジはしっかりと見ること。



- i ボールがアンテナに当たるケース
- ii ブロッカーがアンテナに触れるケース
 - a 台上よりスパイクを打つ。
 - b アンテナぎりぎりに打つ。

c アンテナ外を通過するボールを取り戻すケース

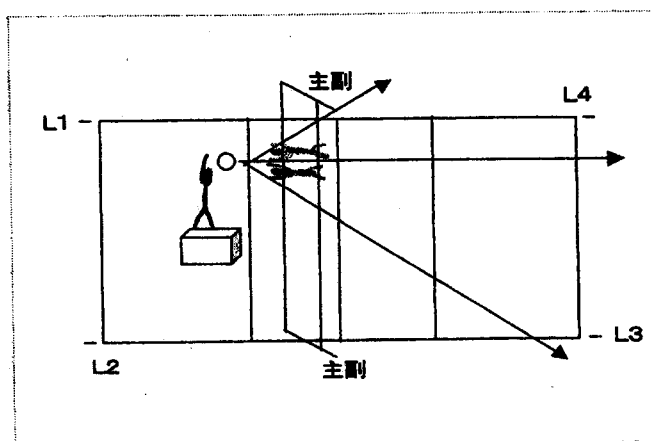


- i アンテナ外通過ボールを色々な角度から取り戻す。
- ii ボールの角度によって、どのラインジャッジがライン判定をおろそかにしないで、どのように動いたらいいのかを確認する。

- ・ ラインジャッジの動きに十分注意すること。ボールのコースに入るために、極端に動いてライン判定がおろそかになったり、またコースに入らないで判定すると不信感をもたれるので動く範囲を十分に確認する必要がある。
- ・ 取り戻されたボールが許容空間内を通過した場合は、フラッグを挙げて左右に振る。

④ ブロッカーとレシーバーのボール・コンタクトについて

- ・ 特にブロッカーの上（指）をかすっていくケースや左右をかすっていくケースは、主審・副審からは非常に見にくいケースもあるので、原則的にはレシーブ側の2人のライン・ジャッジがフラッグ・シグナルを送る。しかし4人のラインジャッジが明らかにボール・コンタクトを確認できた場合は確認したライン・ジャッジはボール・コンタクトのフラッグ・シグナルを送る。
- ・ アンテナ付近、特に副審側でのアタッカーが意識してタッチ・アウトを狙うプレーのブロックのボール・コンタクトはしっかりと見る。
- ・ ライン際のレシーバーのボール・コンタクトも主審の死角になるケースがあるので、ライン判定も十分注意しながら、視野に入れてみる大切である。

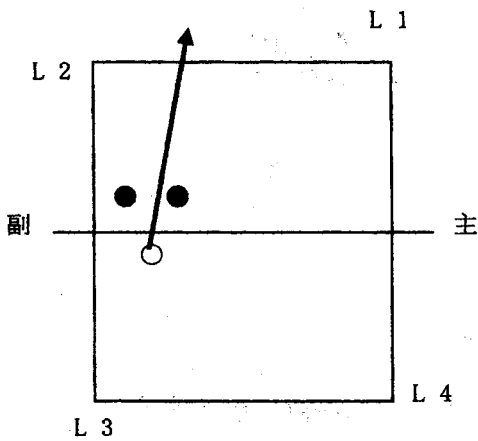


i ブロッカーとレシーバーのボール・コンタクト

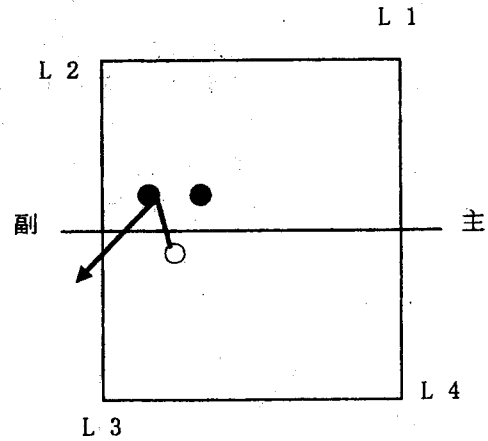
- a 台上よりスパイクを打つ。
- b ボールがブロックの上をかすめるケースと左右をかすめるケース。

『フラッグ・シグナルの出し方』

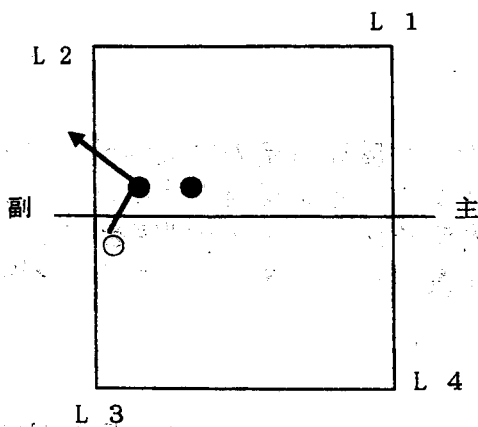
- (1) ボール・コンタクトを認めた場合は、フラッグを顔の前でやや高めに旗を立てて旗の先を別の手で触れる。スパイク・ボールがコート内に落ちた場合は、ボール・インのフラッグ・シグナルを出す。
- (2) ボール・コンタクトでコート外に出した場合のシグナルの出し方について
(下記の図の通り)
- a ライン・ジャッジの任務の基本的考え方は、ライン判定である。
 - b ボール・コンタクトのフラッグ・シグナルは確実なボール・コンタクトのみ、確認できたライン・ジャッジが示す。



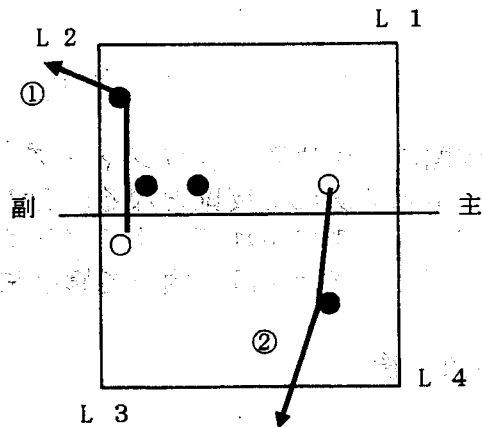
スパイク・ボールがブロックに触れてエンド・ライン外に出た場合。
L 1, L 2, L 3がボール・コンタクトのフラッグ・シグナルを示す。



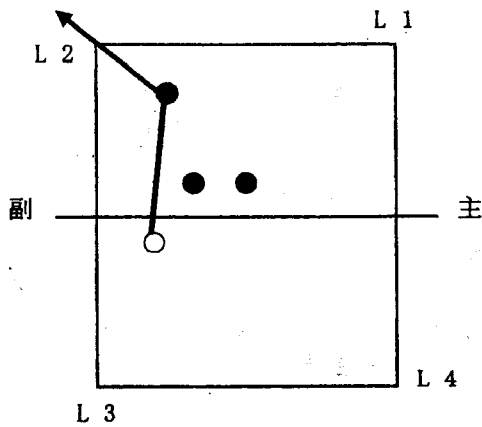
スパイク・ボールがブロックに触れてスパイク側サイド・ライン外に出た場合。
L 3がボール・アウトのフラッグ・シグナルを示す。



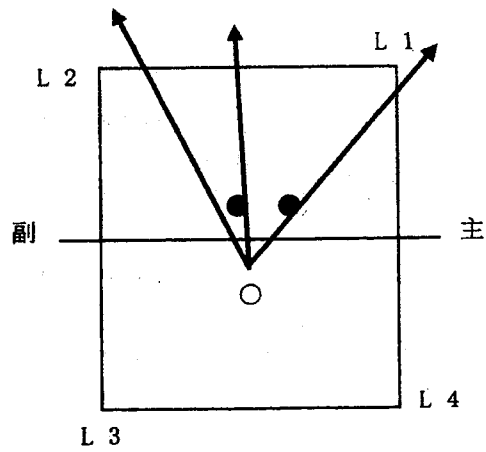
スパイク・ボールがブロックに触れてブロック側サイド・ライン外に出た場合。
L 1, L 2, L 3がボール・コンタクトのフラッグ・シグナルを示す。



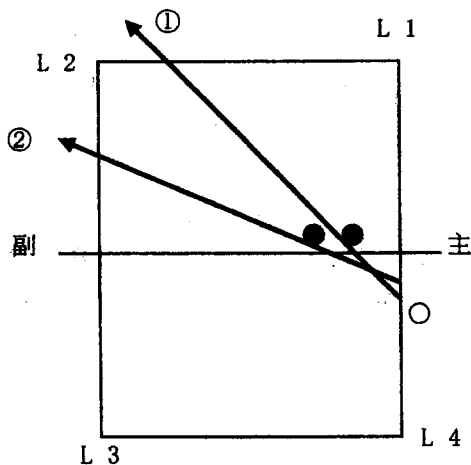
レシーバーに触れてサイド・ライン外に出た場合。
① L 1, L 2, L 3がボール・コンタクトのフラッグ・シグナルを出す
② L 3, L 4がボール・コンタクトのフラッグ・シグナルを出す



スパイク・ボールがレシーバーにかすかに触れてサイド・ライン外に出たとき、L 3のラインジャッジが確認できない場合、アウトのフラッグ・シグナルを示し、L 2が確認できればボール・コンタクトのフラッグ・シグナルを示す。



スパイク・ボールがブロックに触れてコート外に出た場合。明らかに確信できたラインジャッジは、ボール・コンタクトのフラッグ・シグナルを示す。



スパイク・ボールがブロックにかすかに触れてコート外に出た場合

- ① L 1、L 2はボール・コンタクトのフラッグ・シグナルを示す。また、L 4が確認できればボール・コンタクトのフラッグ・シグナルを示す。
- ② L 1、L 2はボール・コンタクトのフラッグ・シグナルを示す。また、L 3が確認できればボール・コンタクトのフラッグ・シグナルを示す。

(3) サーバーのフット・フォールト

- ・ 打つ瞬間の足の位置、及びジャンプ・サーブなどで踏切る足の位置がサービス・ゾーン外やコート内であれば反則となる。その判定はエンドライン担当のラインジャッジが判定しサイドライン側であれば、サイドライン担当のラインジャッジが判定をする。
- ・ フラッグ・シグナルは、頭上で旗を左右に1往復振り、片方の手でラインを指す。

3 試合終了後

- 1) 試合が終了したら、記録席の後方に集合し、主審、副審、記録員と握手をする。
- 2) 何か問題点があったならば、レフェリー・ルームで主審・副審からアドバイスを受けると良い。
- 3) 審判委員長より試合全体を通してのラインジャッジの任務についてアドバイスを受けること。
- 4) 最後にお互いにディスカッションをすること。

『以上』

『アンテナ付近を通過したボールのラインジャッジの判定』

JVA国内事業本部
審判規則委員会 指導部

1. 許容空間外 (アンテナの外側または上方) を通過した場合

1) ボールがフリー・ゾーンやフリー・ゾーン外に落ちたとき。

① 一回目・二回目のプレーの場合

主審：落ちた瞬間に吹笛をする。

副審：吹笛をしない。

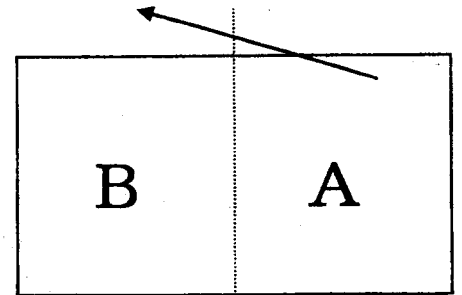
ライン・ジャッジ：落ちた瞬間に「アウト」を示す

② 三回目のプレーの場合

主審：ネットの垂直面を通過した瞬間に吹笛をする。

副審： ”

ライン・ジャッジ：ネットの垂直面を通過した瞬間に「アウト」を示す



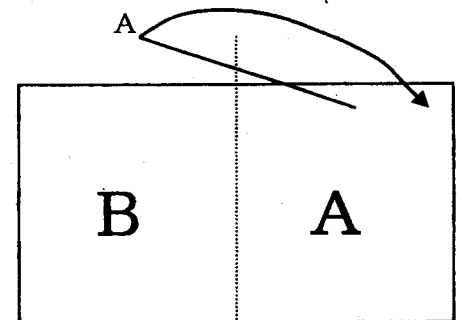
2) Aの選手がボールに触れたとき。

① 許容空間外を通過してボールを取り戻したとき

主審：吹笛をしないでラリーを続行する。

副審： ”

ライン・ジャッジ：フラッグ・シグナルは示さない。



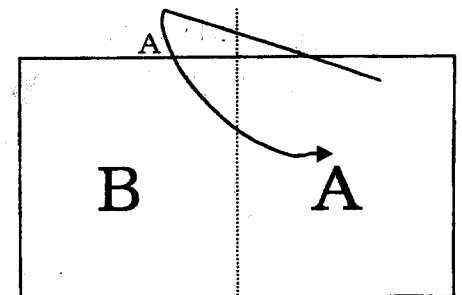
② ボールが許容空間内を通過したとき。

主審：ボールがネット上を完全に通過した瞬間に吹笛をする。

副審： ”

ライン・ジャッジ：フラッグを振る。

(一往復)

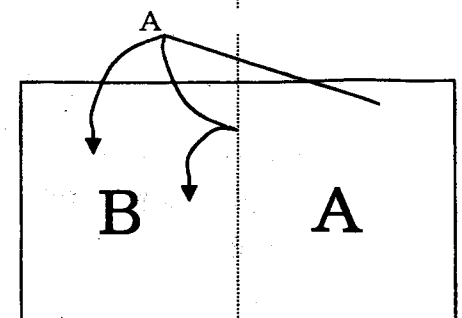


③ ボールがアンテナの内側のネットに触れたり、床に触れたとき。

主審：ボールがネットに触れたり、床に触れた瞬間に吹笛をする。

副審：吹笛をしない。

ライン・ジャッジ：フラッグ・シグナルは示さない。



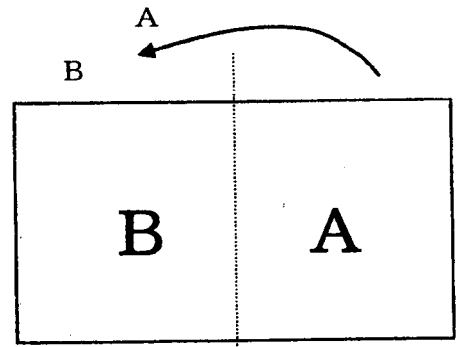
3) ボールがアンテナの真上や外側を通過してBチームの選手に触れたとき。

① Aチームの選手がボールを追いかけている場合、Bチームの選手のインターフェアとなる。

主審：Bチームの選手がボールに触れた瞬間に吹笛をする。

副審：吹笛をしない。

ラインジャッジ：Bチームの選手がボールに触れた瞬間にフラッグを振る。(一往復)

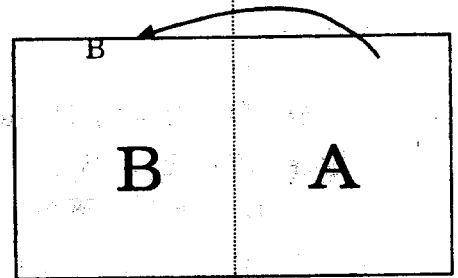


② Aチームの選手がボールを追いかけていない場合

主審：Bチームの選手がボールに触れた瞬間に吹笛をして、Aチームのアンテナ外通過でボール・アウト。

副審：〃

ラインジャッジ：フラッグを振る。(一往復)



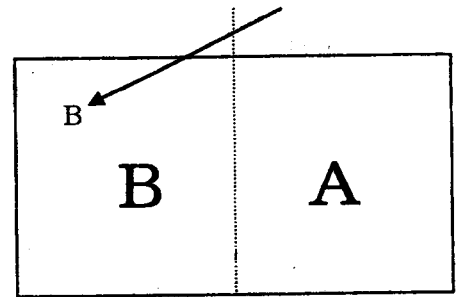
2. Aチームのフリー・ゾーンから許容空間外(アンテナ上方を含む)を通ってBチームのコートに向かっていく場合。

① 一回目のプレーの場合


主審：ボールが床に触れるか選手に触れた瞬間に吹笛をする。

副審：〃


ラインジャッジ：ボールが床に触れるか選手に触れた瞬間にフラッグを振る。(一往復)

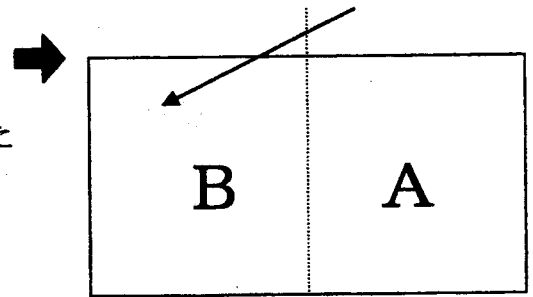


② 二回目・三回目のプレーの場合

主審：ボールが  印のライン面を通過したときに吹笛する。

副審：〃

ラインジャッジ：ボールが  印のライン面を通過したときにフラッグを振る。(一往復)



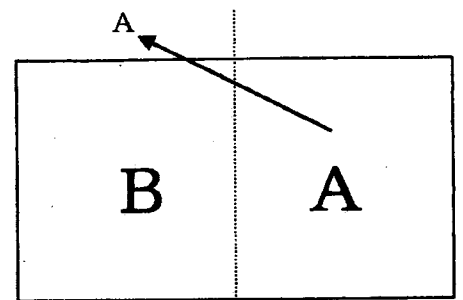
3. Aチームのコートから許容空間を通過してBチームのフリーゾーンに向かって行く場合。

① Aチームの選手がボールに触れたとき。

主審：触れた瞬間に吹笛する。

副審：〃

ラインジャッジ：触れた瞬間にそのコースのライン・ジャッジがフラッグを振る。(一往復)



以上

《ラインジャッジ》

- ①試合開始30分前には、記録席後方に集合する。
- ②両レフェリー紹介直前に2人ずつ、ウォーム・アップ・エリア近くで待機し、その紹介直後に、それぞれの定位置について、プレーヤーの紹介を待つ。
- ③公式ウォーム・アップが終了したら、担当の位置につき、ネット及びアンテナ等が正しい位置に取り付けてあるかどうかチェックする。特にアンテナの取り付け位置についてはゲーム中でも十分注意する。
- ④ラインジャッジの位置は、担当するラインの想像延長線上でコート各コーナーから2m離れて、ラインに正対してフリー・ゾーン内に立つ。サーバーが、サイド・ラインの延長線付近から打つ場合は、サイド・ライン担当のラインジャッジは、サーバーのフット・フォールの有無を見るために、サイド・ラインの延長線上でサーバーの後方に位置する。横へは開かない。
- ⑤公式フラッグ・シグナル【以下「シグナル」とする。】(ボール・イン、アウト、ボール・コンタクト、アンテナ外通過、サーバーのフット・フォールト)を使用する。
(主審が受け入れない場合はただちにシグナルをやめる。)
シグナルを出す場合、身体とフラッグはラインに向け、顔だけを主審の方に向けて目をあわせる。
- ⑥起きた反則は確実に判定し、速やかにフラッグ・シグナルを示す。主審は、そのシグナルを確認して最終判定を示す。
- ⑦姿勢は、アウト・オブ・プレー時は自然体でリラックスして良いが、サーバーがボールを打ってから、移動しやすい低い姿勢を取り、目の位置を下げて、身体(腰)でボールを追う。目の位置が高いとボールを上から見ることになり、ボールと床の接点が死角となりボールがラインに触れているか明瞭に分からない。低い姿勢が必要な時と、そうでない時の区別をつける。サーバーがエンド・ライン後方から打つ時、サーバー側のエンド・ライン担当のラインジャッジは、低い姿勢を作る必要はない。
- ⑧ラインの判定は構えた姿勢から足をそろえて、ボール・アウトは、フラッグを真上に素早く挙げる。(フラッグのポールに人差し指を添えて握る。)ボール・インの時も同様にしてフラッグを下げて指す。肘が曲がらないようにする。また、ボールがライン付近に落下した場合は、そのラインを担当するラインジャッジだけがシグナルを出す。(1人1線が原則で、ライン2m以内とする。)各コーナー内側の1m四方に落ちた場合は、2人のラインジャッジがシグナルを出す。
- ⑨ボールがアンテナに当たった場合(ネット幅の部分を含む)は、確認できたラインジャッジが頭上でフラッグを左右に振り(1往復)片方の手でアンテナを指す。アンテナ外通過ボールの判定は、ボールのコースに位置するラインジャッジだけが判定する。
- ⑩サーバーのフット・フォールトがあった場合は、担当ラインのラインジャッジが頭上でフラッグを左右に振り(1往復)片方の手でラインを指す。
- ⑪ボール・コンタクトを確認した場合は、フラッグを顔の前でやや高めに立てて、フラッグの先を別の手で触れる。ボール・コンタクトは、イメージによる判定は慎重、確信をもてるケースのみ示す。
- ⑫ラインジャッジは、ボール・リトリバーやモッパーが任務を遂行していない場合には、タイム・アウトやセット間にアドバイスを与える。
- ⑬フラッグの大きさは、40cm×40cmである。
- ⑭試合が終了したら、記録席の後方に集合し、主審・副審・記録員と握手する。